

Title	スノッリの『エッダ』序文にみられる異教神話観
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.241-p.250
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80475
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スノッリの『エッダ』序文にみられる異教神話観

菅 原 邦 城

Snorri's Views on Heathen Mythology disclosed in the Prologue of his *Edda*.

Kunishiro Sugawara

The purpose of this essay is to speculate about Snorri Sturluson's conception of Northern mythology chiefly through the Prologue of his *Edda*, a textbook of ancient Scandinavian poetics. In the present essay the writer would like to show that the great Icelandic's conception of heathen mythology is not of his own as some Japanese would assume, but rather a typical one of the average intellectuals of the Catholic Middle Ages.

I

古代北歐の神々に関する資料として我々は、神々の名をふくむ多数の地名とルーン銘文、11世紀ドイツの神父ブレーメンのアダムGesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum、12—13世紀デンマークのサクソ・グランマティクスの *Gesta Danorum*、アイスランドに伝わる様々なエッダ詩とスカールド詩と数多くのサガ、そして8世紀英国の叙事詩 *Beowulf* をもつ。しかしエッダ詩とならんで、キリスト教以前の北歐人の神々についての概念、神々の性格とその行為・功業にまつわる物語にかんする最大最良の現存資料は、スノッリ・ストゥルルソン（1179—1241年）の *Edda* である。

『エッダ』は、10—12世紀の詩作法、ケンニング（*kenningar*、代称：ある名詞を他の2つ以上の名詞でいいかえる法）、ヘイティ（*heiti*、同意語：ある名詞を他の名詞でいいかえる法）および詩韻律（*bragarhættir*）にかんする最も完全な文献となっており、また今日他から知ることが全く困難ないし不可能になっている数多くの詩歌を伝えている。しかし、これだけでは『エッダ』の評価として十分でない。すなわち、この作品は13世紀以来つねにアイスランド人の生きた民族文学であり続け、この民族の文学において豊かなみりを結んできた。そして、この国の詩人なら誰でも水を掬んできた涸れることのない泉なのである。19世紀までのアイスランド文学において、『エッダ』の存在意義と後世に与えた影響はおそらく他のいかなる古典をも凌ぐだろ

う。その神々と英雄にかんする物語は、なお今日でも、単にアイスランド民族のみならず他の北欧諸民族によっても、「娯しみと知識のために」読まれているのである。

『エッダ』の構成は、*Gylfaginning*「ギルヴィの惑わし」、*Skáldskaparmál*「詩語法」、*Háttatal*「韻律一覧」の主要3部、そして *Formáli* (*Prologus*)「序文」からなっている。これを作者スノッリは確固たる意図をもって編んだ。すなわち、詩学教本として編んだのである。彼はこう言っている： „...petta er nú at segja ungum skáldum, peim er girnast at nema mál skáldskapar ok heyja sér orðfjölða með fornum heitum eða girnast þeir at kunna skilja þat, er hulit kveðit, pá skili hann þessa bók til fróðleiks ok skemmtunar.“ (今度は若い詩人達に、詩の言葉を修得し古い名[ヘイティ]の貯えを我が物とすることを切望する者、あるいは詩に秘されている事柄を理解できることを切望する者に、彼は本書を知識と娯楽のために吟味すべきであると言わねばならない。)¹ これは、スノッリの素材の取扱いからも明らかである。まず「ギルヴィの惑わし」の中で彼は、神々について、その起源の詳細と生涯、その生と死を物語る。これらの物語から、いかにして数多くのケンニングが生じたかが明らかにされ、それと同時にその古い神話に基づいて、さらに新しいケンニングを作りだせる可能性が指摘される。次の「詩語法」では、古い物語がなお付加されもするが、最重点がおかれるのは作詩法、ことにケンニングとヘイティの使用法である。自分のあげるケンニングとヘイティをスノッリは、古代の詩人たちの詩歌の引用でバックアップし正当化する。彼はここで、およそ350の詩節と詩節断片を引用する。最後の、作者がノルウェー王ホーコン・ホーコナルソンとその義父スクーリ伯にささげた頌歌「韻律一覧」は、100種の韻律による模範詩102例と、これに加えた散文での詳しい説明からなる。

「韻律一覧」が1222—23年に作られたとする学説が近年有力になっているが、² その他の部分がいつ成ったか、いかなる順序で完成されたかについては、専門家の見方は必ずしも一致していない。

筆者はこの小論で、『エッダ』の主要写本のひとつ *Codex Regius* (GkS 2367, 4°, 1325年ころ。デンマーク王立図書館蔵) によったグヴズニ・ヨウンスソンの版所収の「序文」を主にして、『エッダ』作者のキリスト教到来以前の異教にたいする見方を考えてみたいと思う。

II

1 *Skáldskaparmál* §8. *Edda Snorra Sturlusonar*. Guðni Jónsson bjó til prentunar. (Íslendinga-sagnaútgáfan, Akureyri 1954), 106. 『エッダ』(*Snorra Edda*) の引用はこの版によるが、引用の章番号は編者の付したものである。なお、以下における文献からの引用、特に古アイスランド語(古ノルド語)のものは、原典それぞれの正書法を尊重し、いわゆる *normalized orthography* で統一することはしない。

2 たとえば、Frederik Paasche (*Norsk Litteratur Historie* Bd. 1: *Norges og Islands litteratur inntil utgangen av middelalder*. Oslo 1924), Elias Wessén (*Corpus Codicum Islandicorum Medii Aevi* XIV, Introduction. Copenhagen 1940), Peter Hallberg (*Den fornisländska poesien*. Stockholm 1962) など。なおグヴズニ・ヨウンスソンは、1221—23年としている (*Snorra Edda*, *Formáli*, x)。

「序文」は、異教にたいする作者のエウヘメリズム的な考えを表わしていると、従来から言われている。エウヘメリズムとは、古代ギリシャの哲学者エウヘメルス（前300年ころ）がその『神聖史』のなかで説いた古代ギリシャの神々にかんする合理的な解釈をいう。それによれば、神々はもともと人間であったが、かれらは自己を神であると主張し神として崇拝されることを強制した。あるいは恐らくその在世中の英雄的勲業ゆえにその死後神として崇拝されるようになった。その崇拝方法のひとつに、かれらの姿を彫像などに造ることがあった。これらの人間は、神として崇拝されるようになる力を得るためにデーモンと手を結ぶ。デーモンは人々の造った像のなかに住みつき、像のあらわす人間にかわって自分を拝せしめた。こうして人々は、自らは死んだ父祖や王などを拝しているつもりでいる時に、デーモンを拝することになったのである。ここでは、古代の神々にかんする2つの見方が融合している。すなわち、神々が、しばしば祖先であるところの人間であった、あるいはデーモンであったとする見方である。エウヘメリズムには、この両方が認められる。

古代の神々にかんするこの解釈は、ヨーロッパ中世キリスト教会のドグマとなり、このドグマは、かつて人間であった異教の神々は真実の神ではなくて悪魔であるとする。かようなドグマの跡を我々は、1000年にキリスト教を国教に採用したと伝えられているアイスランドの修史学の黎明の中に、はやくも認めることができる。この国の「歴史学の父」アリ・ソルギルスソン（1066/67—1148年）は、1122—32年のある時期にまとめた *Íslendingabók* 『アイスランド人の書』の終りで、ウプサーラの支配者ユングリング一族の祖を *Yngvi Tyrkjakonungr*、すなわち「テュルク人の王ユングヴィ」としている。³ 恐らくアイスランドではすでに12世紀までに、古代北欧の神々「アース」（単数 *áss*、複数 *æsir*）を「アジアの人」（*Ásiamenn*）と同一視することが一般になっていたと考えられる。

また曜日名称のラテン語からの翻訳にみられるように、ゲルマン人ははやくに、ローマの神々のなかに自己の神々を認めていた。（たとえば木曜日「ユーピテルの日」*dies Iovis* のゲルマン諸語の対応語：Germ. *Donnerstag*, Du. *donderdag*, Eng. *Thursday*, Dan.—Swed.—Norw. *torsdag*, ON. *Þórsdagr* にはっきり見られる通り、古代ゲルマン諸族に共通して知られていた特定の神が、ローマのユーピテルに擬せられていた。）こうして、キリスト教会によって、古典古代の神々にあてはめられたことが北欧の異教神たちに応用されたとしても、それは自然な仕方として理解できる。

護教にとってきわめて都合のよいエウヘメリズムがキリスト教伝導者によって利用されたことは、容易に想像され得る。これがノルウェーとアイスランドにおいても伝導の当初（10世紀後半）から説かれていたと考えることは、間違いないだろう。あるドイツ人学者は、エウヘメリズムがアイスランドに達したのはキリスト教公認に遅れること100年あまりの12世紀のことであったという。⁴ また、アリとスノッリによって採られたこの中世「自由思想」がアイスランド初期の学者として名高いセームンド・シグフースソン（1056—1133年）によって輸入されたとする説

3 Ari Þorgilsson : *Íslendingabók* (*Íslensk fornrit* I 1. Reykjavík 1968), 27.

4 Walter Baetke : *Die Götterlehre der Snorra-Edda* (Berlin 1950), 22.

もある⁵。しかし、前述のことを認めるならば、これらの説は後すぎるとせざるを得ない。かりにこの説を受け入れたとしても、その場合、伝導時代に古い神々についていかなる説明がなされていたかという疑問が残るのである。改宗は、単にアースたちから Hvíta-Kristr（白きキリスト）への宗旨がえで済んだわけではない。それに劣らず、古い従来の神々にたいする新しい評価、解釈が必要であったはずである。

III

中世アイスランド文学の膨大な写本として知られる14世紀前半に書かれた *Hauksbók* 「ヘウク本」のなかに、古い神々にかんする説教 *Um hvaðan ótrú h'fst* 「不信仰はいずこより始まりしか」（ラテン語副題 *De falsis diis* 「偽りの神々について」）が伝えられているが、⁶ これはその内容の点から伝導時代に属するとみなしてよかろう。ここで伝えられているテキストは、きわめて古いものとされているが、その原典批判はまだ十分になされていない。現在までのところ、英国の司教エルフリック・グランマティクス（1020年ころ没）の韻文による説教（homilia）との大きな類似が指摘されており、これがその説教の翻訳であるとするのも不可能でないという。⁷ もし翻訳だったとすると、このアイスランド語訳者は、古英語テキストの外にラテン語原典を併用したと考えられる。それは、スペインの司教ブラカラのマルティヌスが著わした説教で、司教が在世中の6世紀にスペインの農民の間で行われていたと思われる古代異教崇拝にたいして向けられている。この説教は、現存伝本からみて、かなり流布していたらしい。⁸ これが英国でいつ頃に知られるようになったかは明らかでないが、しかし北欧の異教徒がさかんに侵入してきた時期に再び今日の意義をもつ説教となって、1000年に先だつ数年前にエルフリックによって韻文に訳された。これは、ウルフスターン（1023年ころ没）の散文訳よりも早かった。その翻訳のなかで、南欧古代の神々はその名を北欧人の言葉でいいかえられ、神父たちは、個人的経験から知っていた北欧人の異教に反対する説教を行なっている。

「不信仰は……」はしかし、エルフリックやマルティヌスの逐語訳ではないし、ウルフスターンのテキストも全く使われていないという。⁹ 他方、エルフリックが省いたマルティヌスのラテン語テキストが採りいれられていると同時に、エルフリック訳との言語上の類似点が指摘されているのである。したがって、このアイスランド語訳者はエルフリック訳とともにラテン語原典をも併せ用いたと考えられるのである。そして、たとえば Venus は Frigg（北欧異教の主神 Óðinn

5 Stefán Einarsson : *A History of Icelandic Literature* (New York 1957), 117.

6 Anne Holtsmark : *Studier i Snorres mytologi* (Oslo 1964), 9 の引用によると、*Hauksbók*, udg. af F. Jónsson og E. Jónsson (København 1892—96), 156 ff. に収められている。本論は、ホルツマルク教授の論文（ことに9—16頁）に負うところ大である。記して感謝する。

7 A. Holtsmark : *op. cit.*, 10.

8 *De correctione rusticorum* (Christiania 1883) の編者 C. P. Caspari は、1100年以前の流布本7例をかぞえている。

9 A. Holtsmark : *op. cit.*, 10.

の妻)と訳されているが、これはローマの美の女神は普通 Freyja と訳されるべきなのと異なっている。金曜日 *dies Veneris* は古英語では「フリッグの日」*Frīgedæg* といい、訳者が自分になじみ薄い異教の神名を混同したことも考えられ得る。この1証拠だけで推論するのは危険かもしれないが、「不信仰は……」の原作者は古ノルド語よりも古英語に通じていたと考えられる。そして、その成立時代は、古英語を母国語ないし第一国語とする者が伝導者として英国内外の北歐人のあいだで活動した時期まで遡るのである。この場合、原作とヘルク本所収のものとの間には、200—300年の隔りがあることになる。

IV

「不信仰は……」は、オーソドックスなエウヘメリズムをその内容としている。『エッダ』の作者スノッリがこの異教にたいするキリスト教会の解釈について教育をうけていたにしても、彼がこの説教の古いテキストを精確に知っていたことを証明するものは何も残っていない。「序文」のなかに「不信仰は……」の説教を連想させるような文がありはするが、それは偶然の域をそう出るほどのものでないと思われる。すなわち、両者とも天地創造、ノアの大洪水までは「創世記」に従っている。しかし、それから先はたがいに全く別の方向をたどる。「不信仰は……」は南欧古代の神々を出発点として進む。これに対して『エッダ』序文は、人間の „*af rækðust guðs hlýðni*“ (神への忠誠がないがしろにされた)¹⁰ という不信仰を述べる。そしてバベルの塔や言語の混乱について触れはしないが、 „*þjóðirnar skiptust ok tungurnar greindust*“ (諸民族が分散し、言語が分かれた)¹¹ ので多くの信仰と神にたいする多くの名が生じ、人間は „*týndu guðs nafni, ok víðast um veröldina fannst eigi sá maðr, er deili kunni á skapara sínum*“ (神の御名を失くしてしまい、この広い世界に自分の造り主を知っていると思われる人間がいなくなった)¹²。こうして人間は、パウロが言うように、「神を神としてあがめず……造り主の代りに造られた物を拝」¹³んだ。こうした人間がうけるべき罰は、 „*alla hluti skilðu þeir jarðligri skilningu, því at þeim var eigi gefin andlig spekðin*“ (霊的知恵を与えられていなかった為、すべてのことについて彼らは現世的な理解をした)¹⁴ ということである。聖アウグスティヌスやその後のスコラ学流にいえば、神は人間にこの世を霊的にではなく肉的に理解する知恵を与えたのである。これは中世北欧でも、たとえば13世紀ノルウェーの聖書翻訳 *Stjórn* の序文で、*andligum skyringum* (霊的解明を以て) 理解すべきところで *likamlegr eða veraldlegr skilningr* (肉のあるいは現世的理解) がなされるべきでないと繰返されている。¹⁵ それからスノッリは、真の神を忘れた人間が霊的知恵をもっていなかった時にしたであろうように、天地創造の現世的解釈を展開する。それは、すべてが肉的に解釈される世界像である。スノッリは、キリスト教以前の世界観

10 *Snorra Edda*, 1. 11 *Ibid.*, 3. 12 *Ibid.*, 1.

13 ローマ人への手紙、1の21、25 (日本聖書刊行会新改訳 昭和45年 による)。

14 *Snorra Edda*, 3.

15 *Stjórn*, udg. af C. R. Unger (Kristiania 1862), 5.

が民族によって相異なることを弁えてはいるが、詩人として自らが知っている異教にのみ限定したのは彼にとって当然であろう。こうして、「ギュルヴィの惑わし」そのものに対位しないものは「序文」のコスモスにもないのである。

V

スノッリは、アースたちの祖としてトロヤの英雄より古くまで遡ることをせず、我々が先にアリにその跡をみた論理、すなわちアースたちはアジアの民なりという考えからスタートしている。古代北欧の神々は、古典古代の神々とは同一視されず、かれら独自の人間的生涯を送らさせられている。スノッリにおけるトロヤ系譜は、Vóden すなわち Óðinn で終わっている (*Formáli* § 3)。このオーズィンは „nafn hans myndi uppi vera haft í norðrhálfu heims ok tignat um fram alla konunga“ (彼の名が世界の北の地方において高められ、かつあらゆる王のそれにまして崇められる)¹⁶のように数多の老若男女をひきつれて故地テュルクランド[小アジア]を発ち、まずサックスランド[北ドイツ]に至り、デンマークを経て (*Ib.*, § 4)、スウェーデンの中心シグトゥーナに居を定めた。ここで、ギュルヴィという王に出会うことになる (*Ib.*, § 5)。

好奇心の強いスウェーデン人の王、魔術に長けた男 (maðr fjölkunnigr) ギュルヴィは、新参のアースたちの知識と力の源 (魔術) を知りたく思っ、かれらの館を訪れることになる。そこでアースたちは彼に, ginning (幻覚) を与える。この幻覚, Gylfa-ginning (ギュルヴィを惑わすこと) が、すなわちスノッリのエウヘメリズムの形式なのである。「ギュルヴィの惑わし」の最後の文が、作者のアースを説明する方法をもっとも具体的に述べているように思われる：ギュルヴィがアースたちの幻覚から解かれて自国に帰ると、アースたちは相談して, „minnast á þessar frásagnir allir, er honum váru sagðar, ok gefa nöfn þessi in sömu, er áðr eru nefnd, mönnum ok stöðum þeim, er þar váru, til þess, at þá er langar stundir liði, at menn skyldu ekki ifast í, at allir væru einir þeir æsir, er nú var frá sagt, ok þessir, er þá váru þau sömu nöfn gefin“ (彼らは彼[ギュルヴィ]に語られたこれらの話すべてを想い起し、その中にあった人物と場所に、前に[話の中で]つけられた同じこれらの名をつけた。それは、長い時間が経ったとき人々が、いま語られたアースたちがそれらの同じ名をつけられたこれら [のアースたち] と同じものかと疑いを持たないようにするためであった)¹⁷。

これらのアジアの民はこうして自身を自分たちが拝している神であるかのように見せかける。これは、デーモンが祖先の彫像のなかで祖先であるかの如く拝される本来のエウヘメリズムとは逆になる。自己を神として拝せしめているのは、ここでは祖先たるアースたちであり、いわば迂回が省略されているわけである。これは一種の唯名論であって、実際に崇められているのは、神神の名なのである。「古い信仰」(forn siðr) は祖先の崇拜となり、祖先を通して彼らが崇めた神々の崇拜となり、彼らがとった神々の名の崇拜となる。Ginning は異教の啓示であり, fjöl-

16 *Snorra Edda*, 5.

17 *Ibid.*, 96.

kyngi (魔術) のそれなのである。¹⁸

異教の神々について上のような把握をすることは、重要である。なぜならば、作者自身が読者にそうすることを求めているから。「詩語法」のいわゆる *Eptirmáli* 「結語」のしめくりに、次の有名な言葉が記されている： „En eigi skulu kristnir menn trúa á heiðin goð ok eigi á sannynði þessa sagna annan veg en svá sem hér finnst í upphafi bókar” (しかしキリスト教徒は、異教の神々を信じてはならないし、これらの物語の真実性を本書の冒頭に [すなわち「序文」に] 見られるのとは異なるように信じてはいけない)。¹⁹

VI

我々がスノッリの神話題材にたいする態度を見極めようとする場合、*fjölkyngi* (魔術に長けた), *fjölkyngi* (魔術) という語が、一種のキー・ワードになるように思われる。したがって、同時代の文学においてこれらの語がどのように使われているかを知ることは、無駄でない。筆者は十分な文献を利用できる立場にないのを残念に思うが、具体例をみた範囲内では、これらの説は好感を与えるものとしては使用されていない。1例を、スノッリよりは新しくないと推定されるエッダ詩 *Hávamál* 「高き者の歌」第113節に求めることができよう。ここでは、.../fjölkyngi konu/ skal-at-tu í faðmi sofa, /svá at hon lyki pik liðum. (魔術にたけし女が腕になれば眠るなかれ、さもなくば女は腕もてなれを閉じこめん。)²⁰ と魔法を使う女について警告されている。ところで、スノッリはノルウェー諸王のサガ *Heimskringla* の著者たる修史家でもあり、その神話にたいする態度は *historisch* であり、彼は神話に *vorzeitliche Wirklichkeit* (過去の事実) という土台を与えようとする。この歴史文学の大作をかれは、「ギルヴィの惑わし」の終結した部分、すなわちアースたちがシグトゥーナに定住することになったという個所から書きおこしている。この大作の第一書 *Ynglinga saga* にあって、オーズィンはアジアはアースの国アースガルズの首領で (§2), 予言力をもち魔術にたけ (§5), *Njǫrðr* と *Freyr* を *blótgoði* (犠牲神官) に任じた (§4) とされている。フィン人の女 *Drífa* は *siðkona* (魔女) *Hulð* に不実な愛人たるスウェーデン王 *Vanlandi* に魔法をかけて殺させ (§13), またスウェーデン王 *Hugleikr* は *siðmenn ok alls konar fjölkunnigt fólk* (魔法使いと魔術に長けたあらゆる類の者共) を召しかかえていた (§22)。このように、『ヘイムスクリングラ』の中には魔術とそれに関連する叙述が少なくなく、そこではよくフィン人とフィンマルクの名がみられる。スカンディナヴィア半島最北に位置するフィンマルクは、中世までキリスト教を知らない人々の国であり、したがってスノッリの時代でもここでは異教の神々がさかんに崇拜されていたのである。

しかし *fjölkyngi* が、『ヘイムスクリングラ』にあっては基本的に、作者の資料がキリスト教神父の手になるものに遡りうる個所で言及されていることに、注目すべきである。それは、たとえ

18 A. Holtmark: *op. cit.*, 12.

19 *Snorra Edda*, 106.

20 *Eddukvæði*. Guðni Jónsson bjó til prentunar (Akureyri 1954), fyrri hluti, 52.

ばハラルド美髪王がフィン人の女 Snæfríðr を熱愛した話 (*Haralds saga ins hárfagra*, §25), オーラーヴ一世王が魔法使い Eyvindr kelda, 魔術に長けた首領 Eyvindr kinnrifa, 同じく魔術に長けた豪農 Rauðr inn rammi を殺したこと (*Óláfs saga Tryggvasonar*, §§62, 76, 80) などである。これらは総てすでに、ラテン語原典が散佚してしまったオッド・スノッラソンの『オーラーヴ・トリュッグヴァソン物語』(1190年ころ)のアイスランド語訳にみられる。²¹ この訳によると、オーラーヴ王はさらに Moldafjörðr の有力な異教徒 Hroaldr を殺したという。²² これらは読む者に不快感を催させるような話で、別の個所で次の文に出会って安堵する程である： „En pessa luti er ver segiom fra slicum lutum oc domisogum þa domum ver þat eigi sannleik at sua hafi vert. helldr hyggiom ver at sua hafi synnz þui at fiandinn er fullr up flærðar oc illzku.“ (しかし、我々がかようなことや譬え話について語るこれらのこと、これを我々はかようであった真実とはみなさない。我々はむしろ、悪魔が偽りと邪悪に満ちている故にかように思われたのだと考える。)²³ とか、 „...allir vitu hve morg vndr ok sionhverfingar fiandinn hefir gertt við sina menn. en trvum því af slikv sem oss syniz til þess fallit.“ (すべての人は、悪魔がいかに多くの不思議と幻覚をその手の者共になしたかを知っている。しかし我々は、我々に適切と思われようなことを信ずる)。²⁴

このオッドの態度は、スノッリが若い詩人にアースたちにかんしては「序文」において説いているように、悪魔の惑わしとして信すべきだと求めている態度と一致する。本物の魔法使いであるアースたちを、キリスト教徒は信仰してはならない。「ギュルヴィの惑わし」で彼らが物語ることは偽りであり、真実と事実とはスノッリが学校で学んだキリスト教のおしえの中に示されているのである。彼の考えでは、アースがギュルヴィに伝えたことは、この歴史事実の誤った解釈であるということになる。彼はこうして、できる限り異教神話を聖書にみられる真実の歪曲として呈示しようとする。それは、キリスト教にたいする魔術, nýr siðr (新しい信仰) にたいする forn siðr (古い信仰) なのであって、この観点のもとにスノッリは若い詩人に自己の古い神々に関する書を理解するように求めており、我々もこの書をかように理解すべきだろう。

VII

前述のベトケ論文によれば、スノッリは疑いもなく立派なキリスト教徒であって、その異教神観は当時の支配的な神学からはずれるものではなく、「幻惑」の考えや「デーモン論」を聖アウグスティヌスから得た可能性もあるとする。スノッリにあってアースたちは確かに魔術に長けた者であり、その神界はデモニッシュである。しかし、物語の道具立てはスノッリ自身のものであり、アースをアジアの民とすることによって彼は神々を歴史にひきずりこんでいる。ベトケ教

21 *Saga Óláfs Tryggvasonar af Oddr Snorrason munk.* Udg. af Finnur Jónsson (København 1932), 134—6, 139—40, 117—9 [Rauðr の代りに Hroaldr となっている]。

22 *Ibid.*, 165—6. 23 *Ibid.*, 142—3.

24 *Ibid.*, 142—3.

授は、『エッダ』でも『ヘイムスクリングラ』でもスノッリの叙述のなかに神話と歴史との葛藤を認めた。しかし彼は、エウヘメリズムが第一に古典古代の神々に適用されることを十分にはつきりさせず、実質的にこの神々を北欧の神々と同一視する。他方、アースたちはアジア出身の人間なのである。これらの人間が神となり神として崇拜されるため、彼らに神々の名と儀式を強奪する口実を与えるものは、必然的に「幻惑」によらねばならない。幻惑は、アースたちを人間の祖とする詩人（スカールド）の伝統と教会のエウヘメリズムとの「繋ぎ」である。詩人の伝統によれば、諸王族はその系譜をアースたちにまで遡りうる。一方教会のエウヘメリズムにあっては、アースたちはもともと人間であり、魔法使いであって、デーモンと関りあいを持ったこともあろうが、もし彼らが本当の異教神とみなされるならば根こそぎにされる。ベトケ教授は、スノッリの序文に示されている世界観のなかに1つの自然宗教を認め、これが彼にオーズィンを他の神々の父たる Alföör（全父）とさせたとする。オーズィンは決してキリストとはならない。教授はこう結論している： „Wir haben es in der Gylfaginning mit einem gelehrten Werk des Hochmittelalters zu tun, das zwar altüberlieferten nordischen Mythenstoff behandelt, ihn aber nach dem Vorbild älterer Mythographen und mit Hilfe antiker und christlicher Theorien über das Heidentum und die heidnischen Götter—wenn auch z. T. in selbständiger Abwandlung—verarbeitet.“²⁵ これは、大筋において正しい結論と思われる。「ギュルヴィの惑わし」は、13世紀すなわち中世盛時の著作であり、作者の名とその生涯についても例外的によく知られており、作者自らその著作の意図を明言している。これから、「ギュルヴィの惑わし」を神話論とするよりもまず詩芸書、芸術作品とみなすべきものであり、そうすることが原作者の真意をより正しく把握したことになろう。

VIII 付 説

我々は「ギュルヴィの惑わし」著述の真意を考えると、その内容が著者にとって全くの嘘偽り（hégómi alt ok lygi）なのか知識（fræði）なのか、戯言なのか真剣なのか、判定しかねる。従来の諸説は、いずれか一方を重視しがちであった。たとえばアイスランド学派の最長老ノルダル教授は、次のように考えている。²⁶ スノッリの時代に古代アイスランド文学は2つの方面から脅かされていた。ひとつは教会、他は12世紀に大陸から入ったダンスという詩型であった。前者は、異教の痕跡はひとつ残らず断とうとする狭量に支配され、その極端な例は曜日名称から異教神の名を廃してしまったことである（英語 Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday に相当する Týsdagr, Óðinsdagr, Þórsdagr, Frjádagr が þriðidagr “Third day”, miðvikudagr “Mid-week day”, fimmtidagr “Fifth day”, föstudagr “Fast day” にかえられ、今日に至っている）。このような教会にとっては、たとえ不可欠な要素とはいっても異教の神々の物語にも

25 W. Baetke : *op. cit.*, 67.

26 Sigurður Nordal, Introduction, in *The Prose Edda of Snorri Sturluson. Tales from Norse Mythology*, selected and translated by J. I. Young (Cambridge 1954), 10—11.

とづくケンニングを詩が具体化することは罪であるという考えが自然であった。自分が教会から異教を説いていると非難されないように、スノッリは「結語」(89ページを参照)において若い詩人に自分の考えを明らかにしているわけである。他方、ダンスは詩作法の規則がきわめてルールであり、簡単に作られ、一般のアイスランド人の間にひろく流行していた。そのような環境では、きわめて厳格な規則の順守を要求する伝統的な古代詩は不人気であったろう。こうした正に滅亡の危機にひんしていた祖先の芸術、口承文学を救わんとしてスノッリは『エッダ』をまとめたのである。ノルダル教授の考えは、スノッリにおける対キスリト教、対ダンスという意識をつよく感じさせる。

これに対して、スノッリの物語に宗教性を認めず、これらを作者の楽しみ (skemtan), 知識 (fróðlekr) と考える専門家がいます。²⁷ これに似たものに、『エッダ』のアースなどの話を「短編神話小説」とする考えがある。²⁸ それほどまでに考えなくても、「ギュルヴィの惑わし」を通読すると、筆致はあくまでクールであり、時には作者の筆のおもむくまま、気のむくままに書き続けているような印象をうける。

「序文」を念頭において考えれば、スノッリはキリスト教徒として、『エッダ』全体にみられる祖先の異教神話が信仰の対象とすべきでない戯言であるとみていた。他方、アイスランド人へののみ伝存された古い芸術の伝統を保存する詩人として、彼はその著述の重要性を十分にわきまえていたのである。以上のようなスノッリであればこそ、彼がなぜ狭量な教会とは対照的に、異教にたいして寛大であったかが理解され得よう。正しいキリスト教徒として彼は、アースたちを神 (goð) と呼ぶことはできないが、しかし彼にあってアースたちは、他の中世文学にみられる異教神のように、唯一神に敵対するデーモンと極めつけられるまで零落していないのである。アイスランドの大民会がキリスト教採用を決定したとき、私的な異教信仰はしばらく黙認された。²⁹ この寛容さ——一種の dual religion——が2世紀後のスノッリのなかに受けつがれたのであろうか。あるいは、彼は『オーラーヴ・トリュグヴァソン物語』の作者オッドのように、自分に適切と思われることを信じられる冷静な判断の持主であったのだらう。学問の中心地オッディで中世キリスト教のスコラ学を学んだスノッリは、その影響をうけながらも、伝統的なアイスランド人気質を失わなかった人物なのである。そして彼は、『エッダ』によって、古人の難解な芸 (íprótt) のルネサンスを招来したのである。

(1972.8.2)

27 たとえば、W. P. Ker (*Epic and Romance*. New York 1957, 42—43), F. Paasche (*op. cit.*, 2. utg., 411).

28 E. Mogk: *Novellistische Darstellung mythologischer Stoffe Snorris und seiner Schule*, in *Folklore Fellows Communications* 51 (Helsinki 1923).

29 *Íslendingabók* (*Íslensk fornrit* I 1), 17.